

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字

3

MARCH 2021 NO.970

NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS
<http://www.jrc.or.jp>

令和3年3月1日(毎月1日発行)
赤十字新聞 第970号
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可



わたしも赤十字

寄付の協力者

渡邊 愛 (わたなべ・めぐむ) さん 【p.8でご紹介】

特集

東日本大震災、「あの日」から 赤十字の10年

人間を救うのは、人間だ。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

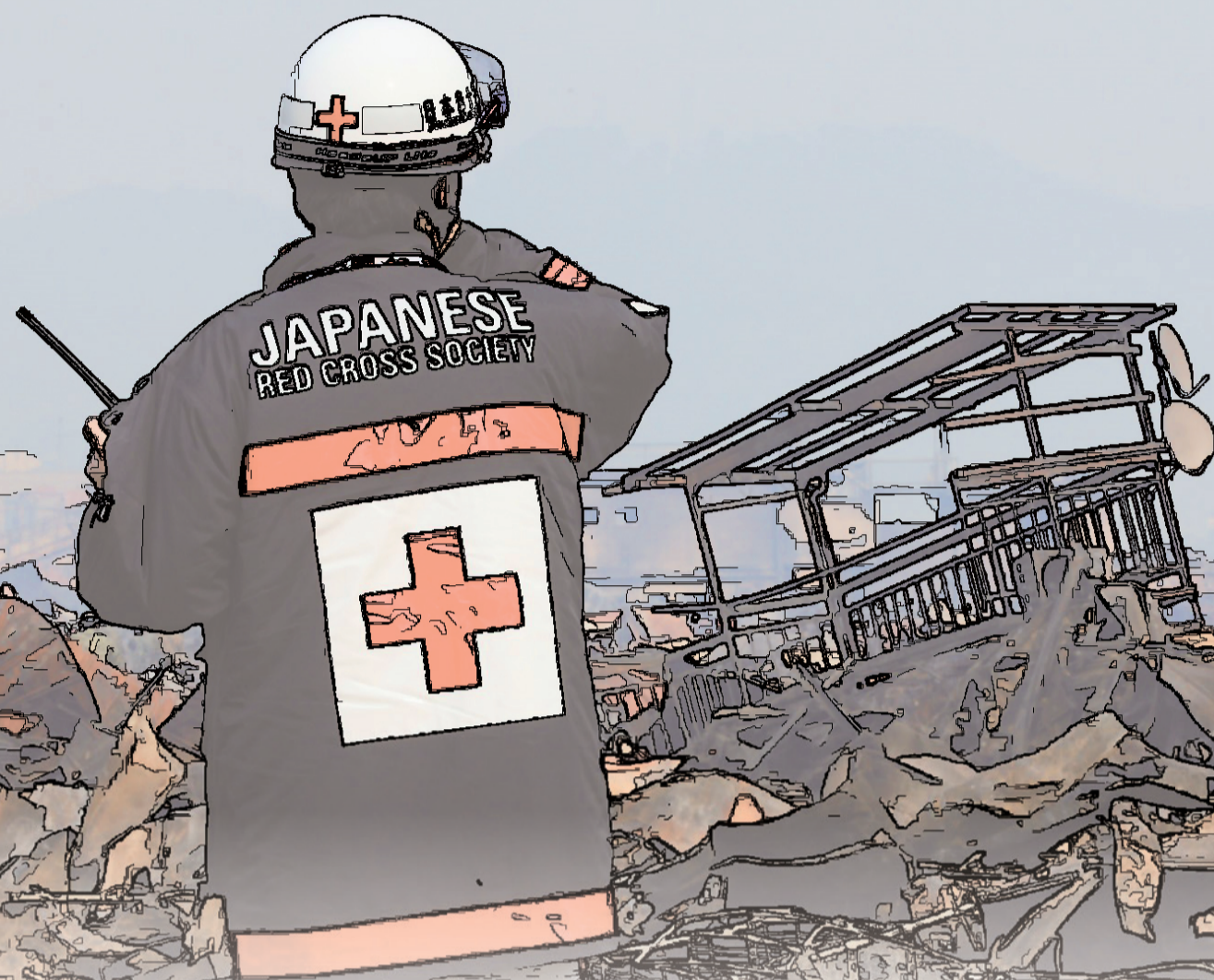
 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society

全てはこの震災から始まった

2011年3月11日、午後2時46分。宮城県沖でマグニチュード9.0の大地震が発生し、最大遡上高40m超の巨大津波が東北地方・関東地方の太平洋沿岸部を襲った。

死者・行方不明者数は2万2000人以上。死因の多くが溺死。日本赤十字社は、災害発生と同時に全国から55班の医療救護班が東北に向かったが…。

被災地では、観測史上最大となった巨大津波によってあまりにも多くの命が失われていた。



東日本大震災、「あの日」から赤十字の10年

命を救う。その使命を果たすために、赤十字、そして「人道」は何ができるか

多くの尊い命が失われた被災地には47万人もの避難者がいた。この人々の命と健康、そして尊厳を守らなくてはならない。以降、6カ月間にわたり、日赤は過去最大規模となる救護活動を展開した。従事した職員は延べ7千人超。持てる能力を総動員して災害救護に立ち向かった。これまで赤十字の活動を理解し支えてくれた地域の奉仕団・各種ボランティアと協働し、行政や他団体・他機関との連携を図り、被災者の立場になって何をやるべきなのかを考えた。ありとあらゆることに想像力を発揮し、被災地のために全国の赤十字関係者が団結して、前例のない多彩な支援活動を実施した。

赤十字は、一般の方々から「苦しむ人を救ってほしい」という願いを託され、被災地で活動する。この赤十字の活動の根幹には「人道」がある。何か痛ましい出来事が起こった時に「自分には何ができるか。何かをしてあげたい」と自然と湧き上がってくる気持ちこそが「人道」。私たちは「人道」を掲げる救護団体として、再び未曾有の災害に見舞われたとしたら、救うことを続けるにはどうしたらよいか。「あの日」からその答えを探し、歩み続けている。



(写真上) 2011年3月15日、石巻赤十字病院で航空自衛隊が緊急輸送する患者を待つ日赤医療チームの医師。(写真下・左) 緊急輸送された患者の家族に容体を聞く石巻赤十字病院の医師。(写真下・右) 陸前高田市の避難所(市立第一中学校体育館)

災害発生直後からの、私たちの歩み

発災直後、沿岸の被災地で感じた「木の匂い」。それは生活が営まれていた家が一瞬にして流され、無残にも崩れ果てた姿となった家の建材や海に漂う木材から発した匂いだった。日赤のあらたな歩みは凄惨な光景が広がるあの被災地から始まり、それまで活動の中心としていた災害発生期に加え、復興期、そして平常時といったそれぞれの状況に応じた災害対応全般に関わる取り組みへと進化した。

1. 災害発生期 (救護活動)

2011年3月11日、発災直後に救援物資を積み込んで東京から被災地へ



2011年3月15日、宮城県の石巻赤十字病院に集結した日赤救護班



想定外のことに対応できる“備え”の重要性を再認識

発災当日に全国から医師、看護師等で編成される医療救護班55班が被災地へ向けて出動し、救護活動を開始。また、持てる力を最大限に発揮し、全国に備蓄している救援物資の配布や、被災者の方々へのこころのケアなどを行った。被災地を支援するために配布された救援物資は、毛布14万8493枚、緊急セット3万8437個、安眠セット1万5406個。こころのケア活動では延べ1万4000人の方々の被災に伴うストレスや悩みの支援を行った。経験したことのない対応が迫られた原子力発電所事故は、救護活動を展開するために必要な情報にも不足があり、困難を極めた。そのため、福島県での活動では緊急被ばく医療アドバイザー(現在の原子力災害医療アドバイザー)を常駐させ、救護班の安全対策に努めながら活動を行った。

これらの経験によって日赤は、長期にわたる救護活動を支援するためのロジスティック中継基地の整備と、医療救護における関係機関との共同連携および日赤内の活動調整を図る「日赤医療コーディネーターチーム」の配備の重要性を認識し、その実現に向けて動き出した。また、原子力災害を経験し、世界で初めて放射線下における救護活動の実施方針や対応策の策定に着手した。

2. 復興期 (復興支援)

2011年9月、徳島県・山形県の赤十字奉仕団が宮城県の避難所で炊き出し活動



2012年2月、放射線の懸念から屋外で遊べない福島県の子どものために開催した「すまいるパーク」



未曾有の災害で見た、中長期的な支援の新たな形

甚大な被害が発生した被災3県の日赤支部をサポートするため、本社に防災ボランティアセンターを設置。発災から翌年3月までに全国で活動した赤十字ボランティアは17万9517人に上り、過去最大規模の活動となった。

また、海外赤十字社からの1002億円を超える救援金によって復興支援を実施。
●仮設住宅への家電セット寄贈 ●仮設体育館の建設支援 ●スクールバス支援
●介護用ベッド寄贈 ●高齢者の肺炎予防のワクチン接種費用の助成
●遊び場を確保する屋内プレイランド(すまいるぱーくなど)設置
●放射線測定のための各種機器の寄贈 ●サマーキャンプ開催
…など、多様な支援が実現した。

被災者の方々の生活再建を支援する義援金については、発災直後から直ちに募集を開始。その全額を被災地に届け、これまで総額3424億9793万412円(令和2年12月31日現在)もの義援金が集まった。

3. 平常時 (防災・減災活動)

2020年2月、栃木県の水害被災地域で開催された「赤十字防災セミナー」



2017年2月、宮城県県の保育園で実施された幼児向け教材「きけんはっけん」の防災授業

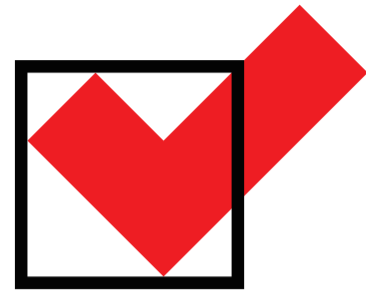


日常から防災意識強化の取り組みを

東日本大震災での教訓を次世代に生かせるよう、救護活動と復興支援の経験をもとにした災害対応能力の強化に取り組んでいる。さらには、従来の応急対応だけでなく、国や地域、学校などとの連携を深め、地域に即した防災・減災活動に取り組むほか、個々の防災意識を高める活動を積極的に展開している。

全国で、地域住民を対象に防災教育事業を実施。地域コミュニティにおける「自助」、「共助」の力を高めるために、居住地に合わせて実施内容を選択できる「赤十字防災セミナー」を行い、地域住民の防災・減災に関する知識・意識・技術の普及を推進。地域において災害発生時の応急対応にあたるリーダー層の育成も目指している。

また学校教育の中で使われることを想定した青少年向けの防災教育教材を作成し、約3万6000校ある全国すべての小・中・高校に配布。自ら考えて判断し、危険から身を守る行動をとれる人材育成と防災意識の向上を目指している。



ACTION! 防災・減災

命のために今うごく

災害は、突然やってきます。今すぐ命を守る“備え”をはじめましょう！

日本赤十字社は、東日本大震災で多くの命が救えなかったという反省から、防災セミナーなどを通じた国民の防災・減災力の向上に力を注いできました。しかし、2020年に行った「東日本大震災に関する調査（日本赤十字社）」によると災害への何らかの備えを行っている人の割合は5割にとどまり、2人に1人は何の備えもないまま災害を迎えてしまうという実態が浮き彫りに。さらに、突如として社会に巻き起こった新型コロナウイルス禍では、感染を防ぐ知識や備えも必要になりました。一人一人の防災意識が高まり、地域の防災力が向上すれば、災害で失われる命を減らすことができると、私たちは考えます。そこで、新たな防災・減災プロジェクトを立ち上げました。題して「ACTION! 防災・減災 一命のために今うごく」。未来に目を向け「災害への備え」の大切さについて皆さまと一緒に考えることで、命を救う具体的な行動(ACTION)を起こすきっかけづくりを目指します。災害時、あなたと大切な人の命を守るのは、今のあなたの行動です。命のために、今、動いてください。



災害に、終わりはない。



じゃあ、備えをはじめるとはどうしたらいいの…!?

#あなたの備えが みんなの備えに キャンペーン

備えを知って、学んで、簡単に「寄付」もできる！Twitterキャンペーンに参加しよう！

あなたの備えをツイート、もしくはリツイートすることで100円が寄付されます

自分自身の「備える行動」をTwitterに投稿することで、その知恵が皆に広がり、一人一人足りなかったものが見える化され、日本全体の「備え」につながる、という企画です。さらに1投稿につき100円が賛同企業から日本赤十字社の防災・減災をはじめとする活動に寄付されます。皆さんが家庭や職場で取り組んでいる「災害への備え」を、「#あなたの備えがみんなの備えに」のハッシュタグをつけてTwitterに投稿してください。



見るだけでTwitterキャンペーンがよく分かる紹介動画。詳しくは特設サイトで。

ACTION! 防災・減災のプロジェクト特設サイト
<http://campaign.jrc.or.jp/bousai/>
 キャンペーンの詳細や必要な備えの解説のほか、日赤の防災減災の取り組みについても詳しくご紹介しています。



写真OK! | 参加無料! | テキストOK!

防災グッズを撮影してツイート | 防災の工夫をテキストでツイート

備えている備蓄品を写真で撮影。避難する時の服を着て撮影。など

災害への備えの工夫をテキストに。これから備えることを宣言。など

「#あなたの備えがみんなの備えに」をつけてツイートもしくはリツイートするだけ!

「東日本大震災から10年」特別企画



宮林美保さん



安高秀喜さん



日下 輔さん

福島で育った私たちの思い

日赤福島県支部が青少年赤十字活動の一環として開催している「詩・100文字提案の作品」コンクール。毎年、福島県内の小中高生が多数応募しています。今回は、東日本大震災後に発表された作品の中から優秀作を3つ選び、その作者に10年を振り返り、語ってもらいました。当時小・中学生だった彼らが抱く、今の思いとは。



この記事の拡大版がWEBで読めます。



みやばし みほ
宮林 美保 さん
 福島市在住
 大学1年生
 震災当時：
 浪江小学校3年生

浪江町から避難したこと、ずっと言えずにいました

浪江小学校で同じクラスだった友達がテレビに映ったのは、福島市で暮らして2年目のこと。もうすっかり福島市の生活が当たり前になっていたのに、気持ちが引き戻されたから、こういう作文を書いたのだと思います。今ではだいぶ気持ちも変わりました。

10年前の、あの震災のことを振り返るなら、まずはお母さんに感謝を伝えたいです。お母さん、**私とお姉ちゃんを守ってくれてありがとう**。軽自動車に私たち姉妹を乗せて、全町避難の指示が出た浪江町から南相馬市、親戚の家、福島市と、転々となりました。避難の途中、お母さんが「ごめんね」と涙を流しながら軽自動車のハンドルを握っていた、その横顔や後ろ姿を、鮮明に覚えています。お父さんが浪江町の消防士だったから、町の仕事のために一緒に逃げるのができなかった。他に頼れる人もいない中、女の子が一人で11歳と9歳の娘を守っていたのは、きっと不安でつらかっただろうと思います。本当にありがとう。

地震が発生したのは金曜日の下校直前でした。お母さんが学校に迎えに来て、小学校5年生の姉と私、3人で浪江町の避難所へ向かいました。そこで一晩過ごし、翌朝、全身を白い防護服に包まれた人がやって来て何かを伝えると、大人たちが「ここから避難しないとイケない」と騒然となって。小学校3年生の私には何が起きているか理解できませんでした。浪江町には農業をしていた祖父母がいたのですが、別々に避難したため、お互いに消息不明になりました。その後、祖父母とは再会できましたが、祖父母は農業をあきらめました。浪江町は原発事故による全町避難で有名になってしまったので、私も浪江町出身であることは、今までずっと周りには言えませんでした。



「わたしの夢・福島のみらい」部門
最優秀賞 (2013年)
 大震災から二年後の去年。テレビに、避難する前の小学校の同級生が出ていた。遠足の集合写真を胸にかかえて…テレビから目が離せなかった。また会いたいな、友達に。また住みたいな、故郷に。これがわたしの夢。

あの頃に戻れないからこそ、思いは静かに強くなる

ずっと一緒にいた家族が、離れ離れになった。お父さんは浪江町の地方公務員(消防署職員)なので、月に1、2回だけ福島市の私たちの家に帰りますが、ふだんは浪江で暮らしています。そして郡山市に落ち着いた祖父母とは、コロナ禍ですっと会っていません。浪江町には避難指示が解除されてから少しずつ住民が戻っていますが、違う場所に根を下ろした住民が多く、戻れる人は少ないのではないのでしょうか。私の中でも、浪江の記憶はどんどん薄れていくのを感じています。わずかに覚えているのは、浪江でとれたお米や野菜の美味しさ。お祭りの時、皆で協力して、どのお神輿が一番元気に声を出したかを競ったりした、ワクワク感。浪江での日々は楽しかった。でも「また住みたいな、故郷に」、作文にそう書いたときの気持ちは、今ではもう、はっきりとは思い出せません。

ただ、そうは言っても、私の意識の奥で「ふるさとへの郷愁」は生き続けているみたいです。大学受験で進学先を考えた時、地方の過疎化に興味があり、地方行政のあり方を学べる科を選びました。どうしたら町や村から人がいなくなる過疎を防ぎ、地域コミュニティを活性化できるか。浪江のことを考えていたわけではないのですが、**町から人がいなくなってしまうのをなんとかしたい**、という思いが強くあります。ちなみに、コミュニティの絆が強い地域は、災害から立ち直る力も強く、復興が早いそうです。コミュニティのあり方は、住む人の幸せにつながり、防災力にも関係している。こういった知識を実践的に学び、地域を盛り上げ、立ち直る力をもった地域づくりに関わっていきたくと思っています。



震災から半年後、浪江小の担任の先生から届いた手紙。思い出の写真に手書きのメッセージが添えられていた

「いのちの詩・愛の詩」部門
福島県支部長賞 (2012年)

悔しかった。
震災があったのに何もできずにいる
ちっぽけな自分が。
怖かった。
急に変わった周りの視線が。
嬉しかった。
「応援してるよ」って言ってもらえる
ことが。
「ありがとう」とたくさんの笑顔に
出会えたことが。

受賞作



発達障害の子には、見えているのに物の動きを目で追えない子もいる。風船を使ったテニスは目のトレーニングになる(「スタジオそら」で勤務中の安齋さん)



あんざいひでき
安齋秀喜さん

高校卒業まで福島県、現在は神奈川県在住。社会人/震災当時：中学3年生

「偏見」への不安と「応援」、両方を味わった学生時代

地震の数日後、福島県の海沿いの地区から僕たちのいる二本松市内につながる道で、見たこともないような大渋滞が起きていました。福島第一原発が制御不能、高濃度放射線が拡散、というニュースが流れたのは、その直後のこと。すぐに姉、僕、弟の3人が、隣県の群馬にいる親戚宅へ一時避難。心細い気持ちで過ごした1週間。二本松市内と群馬県内は放射線濃度がほとんど変わらないことが分かり、新学期の準備のため自宅に戻りました。

4月、少し遅れて始まった福島市内の高校で、クラブ活動で選んだのが青少年赤十字(JRC)です。その年の秋、福島県内のJRCメンバー約100人が、**福島県の農産物の風評被害の払しょくのため、東京都内でPR活動**をすることに。僕のチームは二子玉川の駅前で福島産の梨を配付。もちろん、残留放射能は測定済みです。どんな拒絶反応があるか不安だらけでしたが…大きな声で安全性をアピールしながら梨を差し出すと、予想外のことが。ほとんどの方が「応援してるよ」「頑張ってるね」と、温かい言葉で快く受け取ってくれるのです。

胸がいっぱいになりました。そしてその時の経験をもとに書いたのが、この作文です。

今、社会がコロナ禍に見舞われていますが、僕は、**新型コロナに感染してしまった人たちのことが心配**です。感染したと周りに知られたら、職場や家族に迷惑を掛けてしまう、恐怖の元凶のように見られてしまう…。どれほどの不安の中で過ごしていることでしょうか。放射能の風評被害を恐れていた福島での学生時代を思い出します。放射能も、新型コロナも、正しい情報だけを見て冷静に対処すれば、こんな差別は起こらないはず。こういう偏見がなくなり、感染した人たちの気持ちが軽くなることを願っています。



2011年の秋、東京の二子玉川駅の前で福島産の梨を配る高校1年生の安齋さん

「幸せになるルール」を考えられる社会になれば…

震災から10年。僕は神奈川県内で、発達障害児の通所支援施設「スタジオそら」に勤務しています。JRCの活動で子どもや障害のある方とも接したことが、この仕事に興味を持つきっかけになりました。発達障害のある子どもたちは成長の過程で「他の子ができることが、自分ではできない」ということに気が付き、つらい思いをします。自信を失って生きるのは苦しいです。逆に、できるようになったと、成長を感じて生きられると、幸せになります。この仕事は発達障害の子たちの成長を助けることができ、やりがいを感じます。ある子どもとトレーニングの一環として「果樹園ゲーム」をやった時(それは“動物が来る前に果実を収穫しよう”というゲームなのですが)、その子は「動物が来る前に果実を収穫すること」に成功した後、守った果実を動物にあげる、という行動を楽しそうに繰り返しました。それはゲームのルールからは外れていること。でも、**結果としてその子が幸せになるなら、それも正解**です。社会においても大切なヒントが、そこにはある気がします。僕も学ばせてもらいました。



くさか たすく
日下 輔さん

高校卒業まで福島県、現在は埼玉県在住。社会人/震災当時：中学2年生

不便な生活があったからこそ、人々の豊かさを願うんです

高校教諭の両親は福島市内で避難所の運営をしなければならないので、原発事故発生後も福島に残り、僕と姉は祖母と函館の親戚の家に避難しました。

新学期が始まるので福島市に戻り、不安の中で始まった新しい生活。福島市は、夏が暑いんです。盆地で熱が溜まりやすく、日中35度を超える日が続くことも。そんな中、放射性物質を吸い込まないように、今のコロナ禍の生活のようにマスク、さらに「なるべく長袖長ズボン着用」。僕の中学校には教室に冷房設備がなく、酷暑でも窓を閉め、教室には扇風機が1台設置されただけ。中学3年で受験に向けて大切な時期なのに、暑さで集中力がなくなります。他にも、食事・入浴・洗濯と、日常生活全般に、**見えない放射性物質に対する不安やストレス**を感じていました。

高校を卒業して福島を離れましたが、大学在学中に1年間、米国・ロサンゼルスに留学。そこで、福島存在を思い知らされる出来事が。日本のどこから来たの?と米国人に聞かれ、「フクシマ」と答えると、相手は「…大変だったね!」と。驚くほど、福島という地名を記憶している方が多かった。世界の人々の記憶に焼き付くぐらいの苦難が、福島には降りかかったのだ…と、複雑な思いで故郷のことを考えました。

就職活動で志望したのは「人々の生活を豊かにすることに関われる」企業。それはやはり、**見えないものへの恐れに支配され、我慢の日々を送っていた経験**があるからだと思います。そして、段ボールなど梱包資材の製造販売を全国で展開しているレンゴー(株)に就職しました。今や段ボールはこの家にもあります。通販で買い物をしたら段ボールが届きます。さらに段ボールは、災害時に、避難生活を支えるものになる。段ボールベッドです。僕の会社は全国に工場があるので、災害が起きたら被災地の近くの工場から段ボールベッドの支援ができ、これまでの災害でもその実績があります。福島という被災地で育ち、**福島県民が笑顔になれる未来を願った僕**にとって、日常も非常時も人の役に立てる仕事に、出会えて良かった、と感じています。

「わたしの夢・福島のみらい」部門
最優秀賞 (2013年)

僕らが叶える
福島復興という県民の夢を

僕らがつくる
みんなが笑顔でいる
福島の未来を

僕らがなってる
福島復興の立役者に

今、力を見せつける時

受賞作



レンゴー(株)東京工場の倉庫内にいる日下さん。レンゴーは全国各地に段ボール工場を立地しています

TOPICS 震災を風化させない！ 強い決意で語り継ぐ 宮城・石巻発の「オンライン語り部活動」



石巻の体験談を、全国の小中高生へ生配信。1万人以上が視聴！

日赤宮城県支部が今年1月から取り組んでいる「東日本大震災から10年プロジェクト」。その企画の1つとして、震災の教訓を伝える公益社団法人「3.11 みらいサポート」とタッグを組み、全国の青少年赤十字(JRC)に加盟する小中高生を対象にした「オンライン語り部活動」が実施されています。これは、宮城県石巻市の語り部8人が日替わりで、オンライン会議システムを使い、震災の経験や教訓を生配信するもの。1月13日から3月18日までの期間、計26回にわたり、のべ1万人以上が視聴します。

語り部の体験談を通じた震災の継承活動は、災害は今日も明日も自分の身に起こりうることだと子どもたちが「気づき」、どう行動するべきか「考え」、そのための備えとして「実行する」ための貴重な機会です。宮城県支部はこの取り組みによって、被災地から発信する「震災を絶対に風化させない」という思いを、災害から人々が守られる社会づくりにつなげたいと考えています。

プロジェクトに参加する8人の語り部は年齢も性別もさまざま。避難の判断を誤り、家ごと流され9日後に救出された高校生。逃げ遅れ津波のみ込まれた経験から肌身離さずラジオを持ち歩く男性。就職の決まっていた息子さんを津波で亡くした女性…。大切な家族や家を失ったつらい経験や、あの時できなかったこと・こうすればよかった…という後悔、そして、今を生きる大切さをそれぞれの実体験をもとに語ります。



上:石巻市にある「3.11みらいサポート」の事務所からWEB配信(写真中央の女性が語り部の高橋正子さん)。この日はNHK仙台の取材が入った。下左:語り部の高橋さん。下右:画面の向こうで、真剣に耳を傾ける生徒たち

津波に町ごとのまれ、帰る家を失った避難先の体験を写真の代わりに絵本で伝える

取材時の語り部は、自宅が津波により地区ごと流出してしまった高橋正子さん。甚大な被害を受けた自宅周辺の写真や地図を見せながら、自身や高校1年生だった息子さんの経験を話しました。

「あの日は春のようにとても暖かい日で、いつものように、朝、行ってきますと出かけたけれど、津波で自宅を流され、夕方には帰る家なくなっていました。また、その日は学校が休みで自宅にいるはずの息子と全く連絡が取れませんでした」

当時、息子さんは、お婆さんと一緒にお寺に避難した後、津波が迫るなか裏山に逃れ3日目に救助が来るまで80人の人達と山で野宿をしています。一緒に避難した人の中に、この経験をまとめ、絵本にした方がおり、今回は許可を頂いて高橋さんが読み聞かせました。

お寺の鐘をなべにして作ったお粥^{かゆ}を、皆で分けあい救助が来るまで乗り切った実話です。避難の時にカメラを持っている人はいなかったため、記憶を元に絵本は作成されました。

高橋さんは語りの最後に、帰ったら家族と今日の話をする事、そして「災害が起きたら命を守るスイッチを押す」という2つのお願いを伝えました。

視聴した「いすみ市立太東小学校」の6年生の感想



あらみなみ
新井未南
さん

体験談を聞いたのは初めて。とても恐ろしい震災だと感じました。地域がぐちゃぐちゃになった写真を見て怖いと思ったけど、写真や図を使った説明がわかりやすかったです。私たちの学校も海が近く、もしも津波が来たら低学年の子たちを連れて逃げないといけないので、避難場所や避難方法をしっかり覚えておきたいです。



こしま
小島 湊
さん

高橋さんから高校1年生の息子さんがいると聞きました。避難したときのつらい経験を聞かせてもらったので、このことを知らない周りの人にも、伝えていかないと感じました。そして、僕も津波に備えて対策をしたいと思います。今日は家に帰ったら、高橋さんに話してもらったことを家族に詳しく話したいです。

絵本「なべになった鐘」(作・堀込光子、堀込巨)流された鐘で粥を作り、体を温めながら三日二晩のつらい野宿を乗り越えた実話
(※絵本は自費出版で販売中。詳細はFacebookで「なべになった鐘」で検索。本の収益は東日本大震災の震災遺児の支援活動に寄付されます)



データ提供: 堀込光子



高橋正子さんの自宅周辺。高橋さんの家は土台しか残っていません。 <写真提供: (公社) 3.11 みらいサポート>

3.11 あれから 10年を生きて

第12回

東日本大震災の発生から10年。
「3.11」から人生を変えた人々の物語の最終回です。

2011年3月11日、午後2時45分ごろ。みどり幼稚園の園児たちが送迎バスを待っていたときのこと。突然、ゴゴゴ…という地鳴りと共に激しい揺れが。私は園舎で園児の安全確保をしながら、「来た、本当に大地震が来た。避難マニュアル発動だ！」と職員に指示を出しました。

私が園長に就任してから作成した「地震避難マニュアル」。策定のきっかけは2004年のインドネシア・スマトラ島の地震・津波です。青年海外協力隊員として1993年から2年間、インドネシアで生活した私は、第二の故郷であるインドネシアの地が津波で壊滅的な被害を受けたことがショックでした。そして、こう考えたのです、「この岩手でも大津波は起こり得る。子どもたちの命を守る備えをすぐに始めなければならない」。

地震発生後、先発便で園児たちを送っていたバスが1台、戻ってきました。園の避難マニュアル通りです。大急ぎで園に残っていた園児や職員と一緒に地割れが起きていた園庭を駆け抜け、バスに乗り、マニュアルに従って高台の大槌高校へ。園のバスは全部で2台。少し遅れてもう1台のバスも無事に合流。園が津波にのみ込まれたのは、全員が高校に避難して30分後のことでした。

引率避難した園児は38人。そのうち、20人が当日の保護者のお迎えがなく、高校の体育館で一晩、見守りを続けました。感心したのは、3、4歳の幼い子どもでも極限の状況であることを肌で感じてか、泣いたり騒いだりしないんです。3月半ばなのに雪の降る寒い夜で、避難者が500人近くいるため高校から提供される毛布が不足、園児たちは二人で1つの毛布にくるまれて眠りました。当然私たち職員に毛布はありません。停電で夜間照明もない冷えこむ体育館の中、石油ストーブの近くに場所を取らせてもらえたので助かりました。避難マニュアルで避難場所も周知していたため、翌日のうちにほとんどの園児の保護者が迎えに来ました。そこから、地震発生時にはすでに園を出

津波から園児を守った「気づき」

岩手県大槌町 みどり幼稚園 園長 佐々木 栄光 さん

ていた子たちの安否確認です。避難所を巡り、ごった返す人ごみの中、声を張り上げ園児と家族を探します。ある避難所で呼び掛けた時でした。実家の近所の方が、私に駆け寄ってきました。「佐々木さん、ご両親が…」。まさか、という思いと、やっぱり…という絶望感。前園長である父は、病気により歩行が困難になっていたため、避難行動をあきらめたそうです。そして、父と一緒に、母も家に残ってしまいました。実家は、津波で一掃された町の中心部にありました。残念ながら、今現在も両親の遺骨は手元にはありません…。

私には、震災の直後に茫然自失となっていた時期があります。…天井は抜け落ち、がれきと共に園庭の遊具までが流れ込み、床一面に汚泥が溜まった園舎。5年前に改築したばかりで、多額の返済が残っている…。私は園舎内で立ち尽くしていました。そこへ、ボランティアが一人、また一人と来て、がれきの撤去や泥かきをしてくれるように。ボランティアがスコップで泥を一かきしてくれる。すると床が少しずつ見えてくる。人って不思議ですね。見返りを求めず黙々と汗を流す彼らの姿を見ているうちに、力が湧いてきたんです。ありがとう、ありがとう。自分もまだやれる…。園は2階まで津波につかる甚大な被害を受けましたが、たくさんのボランティアのおかげで、きれいになりました。その後、海外赤十字社の支援も受けられ、震災から3年7カ月後に新築移転しました。



再建されたみどり幼稚園の前に立つ、佐々木園長

わたしも赤十字

今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。



寄付の協力者

渡邊 愛 (わたなべ・めぐむ)さん

宮城県黒川郡/48歳/自治体職員

「活動に参加している」その満足感で寄付を続けています

寄付を始めたきっかけは東日本大震災です。つらい状況に置かれた人たちのために何かをしたいと思っても、私には特技や資格がないので役に立てないと考え、なかなか動けない自分がいました。でも、思い切って日赤に寄付したとき、こういう形で日赤の活動に参加できるのか、簡単じゃないか、と。それ以降、毎月引き落としの形で寄付をしています。実は、私の祖父が熱心に日赤を支援していたんですね。だから子どもの頃に日赤なら安心だと刷り込まれてはいたんですが、実際に寄付という行動に出たのは日赤の活動を随所で目にしてからです。

私の勤務する大衡村は宮城県の内陸部にありま

すが震災直後は停電やライフラインの寸断があり、当日夜、避難所のラジオで「閑上地区の海岸にたくさんの遺体が流れ着いている」というニュースを耳にしました。何が起こったのか分からなかったのですが、その後、被害の酷さを知ることになりました。日赤の活動も報道で知りました。石巻赤十字病院が床にまで負傷者が溢れる状況で救護活動を行っていたり、日赤が物資を被災地に運んでいたり。それを見て、自分は被災地に飛んでいくことはできないけれど、日赤はすぐに支援に向かう、寄付をすれば災害直後から貢献できる、と考えました。寄付したい方は多いはず。その方が一歩踏み出せるように、橋渡しを考えていきたいですね。

寄付するあなたも
赤十字です

日本赤十字社への
ご寄付の方法

クレジットカードで寄付



Webサイトからの登録により、クレジットカードでご寄付いただけます。ご寄付の方法は、毎年・毎月・今回のみからお選びいただけます。

身近な窓口から寄付



- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口

詳しくはこちら→



日本赤十字社 寄付

検索

donate.jrc.or.jp/lp/

WORLD NEWS

東日本大震災から10年
～復興を見守る海外からの眼～



2020年2月、岩手県大槌町の災害公営住宅の居住者と台湾赤十字組織の王清峰 会長（中央女性）

「困難な時期を日本の皆さんと一緒に過ごせた、私たちは、そのことをとても大切に思っています」

東日本大震災では、海外の赤十字社を通じて多くの支援が寄せられました。中でも、台湾赤十字組織からは、米国に次ぐ70億円を超える救援金が寄付され、同組織の王清峰会長は震災後に15回も被災地を訪問、人々を励まし続けました。今回は王会長にお話をうかがいました。

震災の時、テレビでは衝撃的な光景が放送され、被災者の悲しみ、無力感が伝わってきました。台湾は日本と同じく地震災害の多い国であり、私たちは深く心を痛めて被災者に共感していました。戦後、台湾は日本と非常に緊密な交流があり、台湾が深刻な災害に見舞われた時には、日本の皆さんが手を差し伸べて台湾の復興を支援することもありましたので、日本がこのような深刻な災害に直面したとき、恩返しをしたいと思ったのは自然なことでした。

被災地を訪れるたびに、緑豊かな日本の田園風景、清らかな川、個性的な日本の建築物を目にしました。全体的に穏やかで、のどかで美しい環境です。

被災者の方々が口々にした言葉は「ありがとう」でしたが、その言葉を聞いていて、皆さんの強さ、奥ゆかしさ、たくましさを痛感しました。驚いたことに、愚痴のようなことを聞くことはほとんどなく、自ら立ち上がっていかうとする心に感動しました。これが日

本の国民性なのでしょうね。それから10年がたち、かつての子供たちも成長しました。他都市の大学に通っている子もいますし、台湾にお礼を言いに来てくれた子もいます。

今日の光景は、私が最初に見た被災時とは全く違っていています。人々は相変わらず礼儀正しく、優雅で愛想がよく、再建された建物はそれぞれに個性があり、復興計画は非常に人道的で素晴らしいものでした。被災者同士が慰め合い、助け合い、大人も子供も安心して暮らせる美しい環境の中での生活を送ることができているように見えます。

宮城県の南三陸病院は、早い時期に建て替えられました。今では町民が遠方まで医療を求めて出かける必要がなくなりました。病院が再開された時、子どもたちやボランティアの方々が楽しそうに歌っていたのには感動しました。南三陸町の佐藤仁町長からは、貴重な手作りのシルクのカッコウアートを頂きました。

大槌町大ケ口の災害公営住宅の竣工式では、前町長の碓川豊さんからは「雨がやんだ

後も傘を忘れません*」とっていただきました。私たちは、このような困難な復興の時期を日本の皆さんと一緒に過ごし、美しい家(災害公営住宅)を再建することができたことを、とても大切に思っています。

東日本大震災から10年、被災地であった所の皆様の健康と安全、そして幸せがいつまでも続きますように、また、東京オリンピックが無事に開催されますように、心よりお祈り申し上げます。



台湾赤十字組織の支援で再建された岩手県、吉里吉里保育園の落成式。白いスーツが王会長

*「雨晴れて笠(かさ)を忘れる」：ことわざ。困難が去ると、その時に受けた恩を忘れてしまうことのとえ。

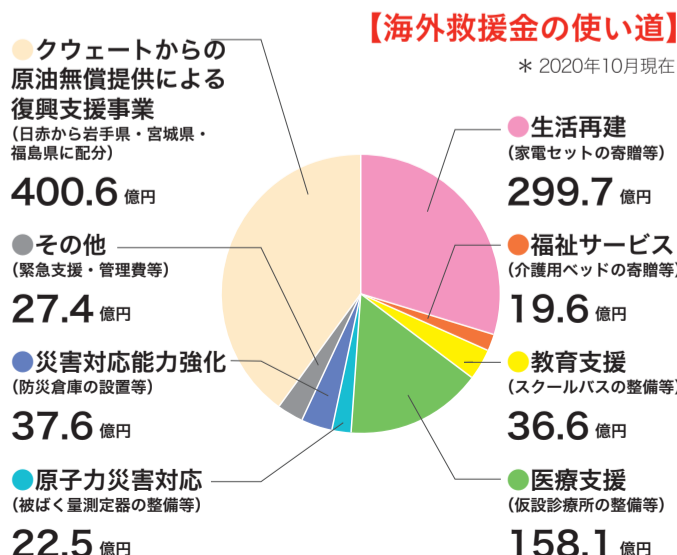
数字で見えた! 日本に差しのべられた世界中からの支援

日本の皆さまの寄付が世界で苦しむ人々の助けとなっているように東日本大震災で未曾有の被害を負った日本にも世界中から寄付が集まりました。寄付がどのように復興に役立てられたのか数字でお伝えします。

東日本大震災で集まった、海外からの寄付

1002億
1438万円

*円グラフの金額は小数点以下第一位までの表示としているため、上記金額と一致していません



東日本大震災の発生後、100を超える国や地域の赤十字・赤新月社を通じて総額1000億円以上の救援金が届けられ、生活再建やインフラ整備といったさまざまな復興支援に役立てられました。

救援金を活用し、仮設住宅などで暮らす方に冷蔵庫・洗濯機など家電6点セットが贈られ、津波で全壊した保育園や幼稚園を再建、介護施設向けに介護用ベッドが提供されるなど、人々の暮らしに寄り添った支援が実現。被災地児童を北海道サマーキャンプに招待するなど心の復興にも役立てられました。

また、クウェート政府から寄贈された約400億円相当の原油を原資とした寄付金は、岩手、宮城、福島県の3県に配分され、震災で壊滅的な打撃を受けた三陸鉄道の新車両導入や駅舎の整備に生かされ、三陸鉄道は2014年に全線運行を再開しました。



宮城県 東日本大震災から10年、復興支援プロジェクトを実施中
「支えた人」「支えられた人」のつながりを大切に...

震災当時、国内外から寄せられた多くの支援が、被災地再起の大きな力になりました。ところが現在、新型コロナウイルス感染症の拡大により、「支えた人」「支えられた人」の再会や交流がままならない状況が続いています。震災から10年。コロナ禍の“分断”に屈することなく、「震災を風化させない」という強い信念を掲げ、日赤宮城県支部は「東日本大震災から10年プロジェクト」に取り組んでいます。

同プロジェクトでは3月5～11日の7日間、救護活動や復興支援に携った人々の思いを地元紙に掲載。日赤が結んだ絆を胸に刻む団体・個人を訪ね、支援者からの一方通行ではなく、今のつながりを相互に確かめ合う記事を発信します。他にも、Web配信で被災者の実体験を若い世代に語り継ぐ企画や、震災時に石巻で活動した全国の日赤職員(150人)やボ



動画では、さまざまな地域・立場の方が感謝の思いを語る。
3月上旬、宮城県支部公式YouTubeにて公開予定

ランティアによるメッセージカードを災害公営住宅の入居者に配布する企画、仙台89ERS(11ページで紹介)と協働するほか、支部公式YouTubeでは世界中へ感謝を伝える動画も公開します。

岩手県 災害救助犬ユキとサチ
赤十字ボランティアと共に出勤

1月14日、日赤岩手県支部は災害救助犬のユキとサチに赤十字マーク入りハーネスラベルを贈呈しました。ユキとサチは、赤十字防災ボランティアの佐々木光義さんと行方不明者の捜索を行った実績があり、今後は赤十字マークを付けて出勤する予定。佐々木さんは「マークの重みに恥じないよう訓練に励み、しっかりと役目を果たせるように精進させたい」と語りました。



ユキはゴールデンレトリバー8歳、サチはシェパード7歳

山形県 小学生たちから寄付の申し出
栽培したお米の売上を支援に

1月29日、日赤山形県支部に寒河江市立高松小学校の児童から赤十字の活動資金が寄贈されました。この寄付は、同校の4年生が校内で栽培した地域産の谷沢梅の梅干しの売り上げ2万5千円と、5年生が地元農家の協力を得て栽培したお米の売り上げ5万円を合わせたもの。児童たちは話し合い「新型コロナウイルス対応や災害で困っている方々に役立てば」と寄贈を決めました。



日赤支援のきっかけはコロナ禍「3つの顔を知ろう」の授業だった

全国 防災ボランティアリーダー
初のオンライン研修会を開催

「防災とボランティアの日(阪神・淡路大震災の発生した日)」の前日となる1月16日、日赤本社主催の「防災ボランティアリーダー養成研修会」がオンラインで開催されました。災害時に救護活動に携わる赤十字防災ボランティアが個々の特性を生かして活動ができるよう、その調整役を担うリーダーを養成する本研修に、全国からボランティア31人が参加しました。



オンライン開催ながら意見・質問が活発に交わされる研修となった

静岡県 「修学旅行中止」で一念発起
社会貢献のガウン作り

浜松市の天竜高等学校2・3年生180人と教員は、日赤静岡県支部の赤十字奉仕団のサポートを受け、ビニール製の衛生作業用ガウン700着を制作、浜松赤十字病院に寄贈しました。同校の2年生は昨年11月に予定されていた修学旅行がコロナ禍の影響で中止になり、自分たちにできる社会貢献を考え、「苦しいのはみな同じ、医療従事者の力になろう」と制作に励みました。



赤十字奉仕団と協力し、厚手のビニール袋でガウンを制作する生徒

香川県 旅客船の負傷者を救え!
海難事故の救助訓練に参加

日赤香川県支部は、1月29日に高松港で実施された救助訓練に参加しました。高松海上保安部、高松市消防局との合同訓練で、旅客船の事故により負傷者が発生、新型コロナウイルスの感染が疑われる乗客も船内にいる、という状況を想定。香川県支部は国内型緊急対応ユニットdERU(仮設診療所)を設置、負傷者のトリアージや応急処置を行い、関係機関との連携を確認しました。



当日は強風が吹き荒れる中、海難事故訓練を展開

常任理事会開催報告

令和3年2月19日、令和2年度第8回の常任理事会が開催されました。

- 理事会および第97回代議員会に付議する事項について
(役員の選出、令和3年度事業計画、令和3年度収支予算)
- 理事会に付議する事項について
(一般会計予算の補正、日本赤十字社会計関連規則の改正)
- 予算の補正について
(一般会計、医療施設特別会計)
- 規則の改正について
(日本赤十字社会計関連規則)
- 独立行政法人福祉医療機構(WAM)からの運転資金長期借入金の個別借入について
(北見赤十字病院他6施設)

審議の結果、上記1については、理事会および第97回代議員会に、上記2については、理事会にそれぞれ付議することが了承され、上記3～5については原案のとおり議決されました。

また、予算の補正にかかる社長専決事項について、報告しました。

※オンラインによる開催となりました。

「赤十字を応援！」プレゼントA さとう宗幸 歌手

おのくん&オクトバス君&サイン入りトートバッグのセット

3名さまに

さとうさんの故郷、宮城県の東松島市の復興を願って生まれた「おのくん」のぬいぐるみと、南三陸町のタコがモチーフの合格&復興祈願キャラクター「オクトバス君」

被災地で医療を守った赤十字の活躍が今も目に焼き付いています

私の故郷・宮城県は、東日本大震災で大きな被害を受けました。沿岸部最大の街・石巻はとりわけ津波で壊滅状態となり、ほとんどの医療機関が消失しました。難を逃れた石巻赤十字病院が診療の一大拠点となり、日夜あふれる患者の診療に当たっていた映像は今でも目に焼き付いています。当時、私も多くの避難所を訪ねましたが、赤十字マークをつけた多くの医療従事者の皆さんの姿に、避難していた方々はどれだけ心強く思われたことかと思えます。

新型コロナは収束の出口もいまだに見えず、飲食店の閉店や生活困窮者の急増、医療機関のさまざまな環境問題や医療機関従事者の疲弊などなど...、いまこの国のあるべき社会の姿が問われているように思います。国に任せるだけではなく、みなさんと共に乗り越えていきたいものです! "no gains without pains" 近い日必ずや光明が射してくるでしょう。

さとう・むねゆき©1949年1月25日、岐阜県生まれ。幼少期より宮城県で過ごす。デビュー曲「青葉城恋唄」がミリオンヒット、主演ドラマ「2年B組仙八先生」など俳優業も行う。震災後は、宮城県に縁のあるアーティストでつくる「みやぎびっきの会」での活動や、被災地の子どもを支援する「びっきこども基金」の立ち上げなど、支援活動に取り組んでいる。



「赤十字を応援！」プレゼントB パートナー企業紹介 vol.12 株式会社仙台89ERS

コロナでもポジティブに。地域の希望の光になりたい

2020年より日赤宮城県支部とパートナーシップ協定を結んでいるプロバスケットボールチーム、仙台89ERS。試合会場でも赤十字のPRブースを設置したり、南三陸町で行われた震災復興祈念ゲームの協働や赤十字病院への慰問、選手やスタッフが赤十字救急法の一次救命処置講習を受講するなど、さまざまな方法で赤十字活動の普及に取り組んでいます。シーズンオフには社長と選手が実際に献血ルームへ足を運び、献血も初協力しました。震災後に解散の危機にあったチームを署名、募金活動で支えてくれたのが地元・宮城のファン。地元への貢献として、ボール寄贈プロジェクトや中学・高校3年生の引退試合の支援などを行っていましたが、今シーズンは、閉塞感漂うコロナ禍でも宮城の皆さんに元氣と希望を届けようと、県内各地を回り、ナイナースの輪=HOOPを広げる「NINERS HOOP」をスタート。ファンとともに地域を盛り上げていきます。

賛同企業とともに地元中学、高校へのボール寄贈プロジェクトも行っている

コラボウデペ 10名さまに

※開封したときのイメージ

商品写真はイメージです
災害で閉じ込められたときなど、「イザというときに命をつなぐ笛を持ち歩いてほしい」という思いから誕生した、日赤コラボデザインのウデペ

インターネットアクセス
上記プレゼントA希望者は、右記二次元バーコードからご応募ください。 →

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 3月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥3月号に関するご意見・ご感想

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 3月号プレゼント係
FAX / 03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。
3月31日(水)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます



近所に住む
親に声をかけ、
地域の防災訓練に
一緒に参加した。

大雨の際、近くの
川の様子を見に
行ったりしないことを、
祖父と約束した。

大規模災害時に備えて、
家族全員7日分の水や
食料を揃えた。

タンスを
L字金具で
固定し、地震の
対策をした。

懐中電灯と厚底スリッパを、
子供の寝室、夫婦の寝室
それぞれに置いた。

災害用伝言板の使い方を、
家族で練習した。

感染症を考慮し、マスクや
消毒液を数日分用意した。

エアコンの真下にあったベッドを
移動させるよう、実家に電話した。

ベッドを連れて
避難できる
ところを探した。

登下校中の
避難場所を、
親子で話し合った。

子供用オムツと
ミルクをリュックに
数日分準備した。

自宅外に避難する
際に、何を着たら
いいか確認した。

夫婦それぞれ、
勤務先付近の
避難場所を確認した。

スマートフォンの乾電池式
充電器を、家族の人数分揃えた。

避難の際に、自分の
家族にとって重要なものを、
ひとつのリュックに詰めた。

避難した際にいつも
飲んでいる薬がわかるように、
お薬手帳を準備した。



ACTION! 防災・減災

命のために今うごく

東日本大震災から10年。災害は、毎年のようにこの国を襲っています。
しかし、災害への備えを行なっている人の割合は約50%。
つまり、2人に1人は、なんの備えもないまま災害を迎えてしまいます。
さらに新型コロナウイルス禍では、避難時に感染を防ぐ知識や備えも必要となります。
どうか、もう一度自分の命について考えてみてください。
災害時、あなたを一番守るのは、今のあなたの行動です。
命のために“今”うごいてください。日本赤十字社は、皆様と共に、
災害に備えるための活動「ACTION! 防災・減災」をはじめます。

赤十字の活動にご参加ください。

- ボランティアに登録する
- 防災セミナーに参加する
- 寄付で支援する

※出典：東日本大震災に関する調査（2020年 日本赤十字社）

救いを託されている。



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society